

スモレットの見落としについて

——『ロデリック・ランダム』を中心に——

近藤 勝志

(I) 序

トバイアス・スモレットが創作を試みた18世紀のイギリスはイアン・ワットが⁽²⁾『小説の勃興』(1957)の中で指摘しているように小説の誕生・発展の上で重要な時期である。ダニエル・デフォーはフォーマル・リアリズムによって、サミュエル・リチャードソンは書簡体形式による心理描写によって、ヘンリー・フィールディングはドン・キホーテからの離脱によって小説という形式も趣向も新しい文学形式の確立にそれぞれ寄与したわけである。そんな中、スモレットは彼らよりやや遅れてこの試みに参加する。

スモレットは創作の意図を『カウント・ファゾム』(1753)の献辞と『ロデリック・ランダム』(1748)の序文で克明に宣言している。献辞では開口一番「小説は一幅の絵である」と宣言する。一幅の絵には当然のことながらキャンバス上を縦横無尽に駆け巡りエピソードのつなぎ役としての主人公が必要になる。スモレットが選ぶ主人公はラーサロやジル・ブラスを祖とするピカロ⁽³⁾である。ピカロは卑賤の出であるため社会の遍歴を宿命づけられた存在である。スモレットは18世紀のピカロであるロデリックに英国社会を遍歴させ、その不正・歪みを風刺・糾弾させつつ

実は英国社会の俯瞰図を描こうとしたわけであるが、ここで二つのことに注意したい。第一は、スモレットが本来陸上の旅に対応するピカレスク小説の舞台を海の旅、つまり航海・冒険にまで拡大させたことである。第二は、スモレットが18世紀のピカロの遍歴と「常ならぬ興味ある視点」によって執拗に現前化を試みながら不在化させてしまう事項があるということである。一言でいえばロデリックの叔父で海軍軍人・船乗りであるボウリングに代表される海にまつわるエピソードとか本文中一度も触れられることのない南米在住のロデリックの父ロドリゲス氏の資産形成の問題である。

上述した不在化される問題を考える時に参考になるのがダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』(1719)の有名な一節である⁽⁴⁾。寄り道になるがそれをここで紹介しておきたい。それはクルーソーに28年にも及ぶ孤島生活を強いることになった黒人奴隷の売買である。クルーソーのブラジルでの農園経営が大筋まっとうな経済活動に依拠していることは言うを待たないが、それについては他で論じたのでここでは割愛したい。周知のようにクルーソーはどこに居ても、またいついかなる時でも父の説諭「中くらいの生活」に甘んじることができない。父のもとを出奔後8年が経過した頃、ブラジルでの農園経営は順調そのものである。農園経営は順調でもクルーソーら農園主は常に労務者不足に悩まされる。当時黒人奴隷の売買はスペイン及びポルトガルの国王の許可のもとに行われる国家的独占事業であったためクルーソーは3人の仲間と秘密裡に奴隷貿易に乗り出す。一行は黒人奴隷を買い入れるためニアヘ向かう途中、暴風により難破する。『ロビンソン・クルーソー』の醍醐味は一人だけ生き残ったクルーソーの28年に及ぶ孤島生活であることに異存はないが、孤島生活の元を正していくと無謀な黒人奴隷の買い取りの現前化に気づかされる。一言でいえば、『ロビンソン・クルーソー』という作品は富山多佳夫氏が指摘する⁽⁵⁾ように海を最大限に活用し領土拡

大に奔走する植民地主義についての強烈な言説を含んだ作品であるということである。同じことが、スモレットの意図の忖度はひとまず措くとして、『ロデリック・ランダム』についても言えるのではないかというのが本論の目的である。

(II) スモレットの小説論

まずスモレットの小説論ともいべき『カウント・ファゾム』の献辞から見ていきたい。

A Novel is a large diffused picture, comprehending the characters of life, disposed in different groups, and exhibited in various attitudes, for the purposes of an uniform plan, and general occurrence, to which every individual figure is subservient. But this plan cannot be executed with propriety, probability or success, without a principal personage to attract the attention, unite the incidents, unwind the clue of the labyrinth, and at last close the scene by virtue of his own importance. (Dedication, 2-3)

小説は一幅の多彩な絵であるという点がまず強調される。当然そこに描かれている人物も様々な階層から成り、様々な姿勢を付与される。いずれもウィリアム・ホガースの銅版画を強く意識しつつ同時に劇の時空の制約に対する小説の無限の可能性を強調したものである。また物語の迷路を解く鍵となる主人公の重視も強調されている。主人公は多彩な人物、エピソードを結びつける縦糸の役割を担わされているわけである。主人公への求心性がしきりに強調されているが、それは裏返せば各々独立完結したエピソードの連続が可能ということにもなる。当然周縁人物

およびエピソード毎の結びつきは緩いものになることに通じる。これは主人公であるカウント・ファズムが絡んだエピソードを自由に組み替えながら際限なく物語を続けられることを意味している。

先述したように、カンバス上を縦横無尽に活動する主人公を描くにはピカレスク小説が最適である。スモレットは『ロデリック・ランダム』の序文の中でピカレスク小説の形式を用いる理由をつぎのように述べている。

Of all kinds of satire, there is none so entertaining and universally improving, as that which is introduced, as it were, occasionally, in the course of an interesting story, which brings every incident home to life; by representing familiar scenes in an uncommon and amusing point of view, invests them with all the graces of novelty, while nature is appealed to in every particular. (3)

あらゆる種類の諷刺の中で、あらゆる事件がピタリ我々の心に訴えるようなそんな面白い物語の中で、思いがけず導入される諷刺ほど面白くかつ教訓に富んだ諷刺は他にないという。ここで第一に指摘できることは、諷刺をより効果的にする手段として面白い物語が利用されねばならないということである。さらに「ありふれた場面を常ならぬ興味ある視点から描くことによってそれらの場面に新奇さの全恩寵を与える」ともいっている。‘entertaining’あるいは‘improving’といった語句は別段スモレットに特有の語句ではなく他の同時代作家に共通して見られる語句である。その意味ではスモレットらしさを強調するのは「不意を打つ諷刺」と「常ならぬ興味ある視点」の強調にあるのではないだろうか。ありふれた場面を最も広範囲にわたって読者に呈示できるのは、主人公の遍歴を軸に物語全体が回転するピカレスク小説の形式である。それがスモレ

ットに特有のものになるのは、そのありふれた場面を常ならぬ視点からとことん見つめれば当然歪みが拡大されて諷刺に通じるということである。ロナルド・ポールソンが指摘するように諷刺の要素はピカレスク小説に内在すると言ってもよい。

諷刺と物語の自然らしさを創作の拠り所とするスモレットが師と仰ぐ先駆者の一人はル・サーージュである。しかしスモレットはル・サーージュとは一線を画さざるを得ない理由をつぎのように述べる。

The disgraces of Gil Blas, are, for the most part, such as rather excite mirth than compassion; he himself laughs at them; and his transitions from distress to happiness, or at least ease, are so sudden, that neither the reader has time to pity him, nor himself to be acquainted with affliction. This conduct, in my opinion, not only deviates from probability, but prevents that generous indignation which ought to animate the reader against the sordid and vicious disposition of the world. (5)

ジル・ブラスの欠点は読者の同情を買うよりもむしろ笑いをさそってしまうところにあるという。それどころかジル・ブラス自身も彼の欠点に笑い興じているというのである。しかも不幸から幸福への転変が急に過ぎるので読者が彼を憐れむ暇がないし、またジル・ブラス自身もその苦悩を嘔みしめる余裕がない。これは蓋然性から逸脱するばかりか、邪悪な社会に対する読者の反感を盛り上がらせることができないとして批判しているのである。スモレットが指摘するように地位、身分への執着はまだ弱く当然批判・諷刺の矛先も鋭くない。

これに対しスモレットはつぎのように新機軸を出す。

I have attempted to represent modest merit struggling with every difficulty

to which a friendless orphan is exposed, from his own want of experience, as well as from the selfishness, envy, malice, and base indifference of mankind. To secure a favorable preposition, I have allowed him the advantages of birth and education. (5)

経験不足それに世間の自分勝手、羨望、悪意、卑劣な冷淡のために孤児があらゆる困難に立ち向かう様子を描くのだという。さらに読者の好意を引き付けるために、出生と教育の利点を付与するともいう。つまりロデリックは厳密な意味では本来のピカロではなく18世紀型のピカロである。社会の底辺・周縁に生きる伝統的ピカロと異なり、18世紀型のピカロは出生と教育の利点を付与されているため社会参加が可能になるということである。第2作『ペレグリン・ピクル』(1751)の主人公であるペレグリン同様自尊心と怒りが気質の二大要素である。ロデリックはペリグリン同様自尊心に起因する復讐を繰り返す。子供の頃、ロデリックに対し理不尽な仕打ちを繰り返した校長への笞刑とか、アイルランド人のオドネル大尉への復讐はほんの一例である。実はこうした復讐譚が作品の大半を占めているが、ここでは本論のテーマと関係がないので割愛したい。

(III) 海のエピソード

物語は形式どおり第1章はロデリックの系図の紹介から始まる。祖父は地主で治安判事を兼務する地方の名士である。ラーサロ、ジル・ブラスとは比較にならない出自であることがまず知られる。しかし父は祖父の承諾を得ぬまま住み込みの女中(叔父ボウリングの妹)と恋愛結婚をしてしまう。しかし家長である祖父は母方の血筋に不満を持ち二人の仲

を認めない。祖父の冷酷さに父は絶望し出奔、母親は出産後急逝する。名門の出でありながらロ德里ックは生誕直後から土地を持たない紳士、つまり18世紀型のピカロになってしまう。

荒っぽい復讐譚とか失敗続きのロンドン生活は割愛し、上京後の海軍との関わりから見ていきたい。ロ德里ックは軍医の試験を受けるため軍医会館へ出かける。12人ほどの委員の前に一人ずつ呼び出され口頭試験を受ける。つぎの引用は口頭試験中に委員との間でなされた遣り取りである。

The first question he put to me was, “Where was you born?” To which I answered, “In Scotland.”—“In Scotland,” said he; “I know that very well; we have scarce any other countrymen to examine here; you Scotchmen have overspread us of late as the locusts did in Egypt: I ask you in what part of Scotland was you born?” (86)

口頭試験中の遣り取りから審査委員はイングランド人が独占し、下級船医の志願者の大半がスコットランド人であることが明らかになる。試験中、審査員は「いなごがエジプト中にはびこっているみたいに、君たちスコットランド人も最近では私たちの回りにはびこっているんだ」とまで言い出す。さんざん揶揄された後、ロ德里ックは3級船の第2助手の資格証明書をもらう。しかし海軍省にコネを持たない身では採用の目処が立たない。やむなく当座の慰みにフランス人薬剤師のもとに勤め口を得るが、乱脈きわまりない薬剤師の家からも追い出されてしまう。極貧状態に陥ったロ德里ックは援助を乞いに友人のもとへ出向く途中ロンドン塔付近で10名前後の強制徴募隊に襲われる。ロ德里ックは奮戦するものの結局頭に大怪我をしたあげくに海軍の徴募用補給艦に乗せられてしまう。海軍はもともとロ德里ックが試験を受けて資格証明書をもら

っていたところである。有資格者でも海軍につがえないため採用がままならないのにこういう形で海軍の一員に無理やりされてしまう。

いずれにしてもロデリックは海軍の一員になったわけである。つぎの引用は軍医助手の任務を負い1等航海士についてサンダー号の船底に降りた時の病室の惨状である。

Here I saw about fifty miserable distempered wretches, suspended in rows, so huddled one upon another, that not more than fourteen inches space was allotted for each with his bed and bedding; and deprived of the light of day, as well as of fresh air; breathing nothing but a noisome atmosphere of the morbid steams exhaling from their own excrements and diseased bodies, devoured with vermin hatched in the filth that surrounded them, and destitute of every convenience necessary for people in that helpless condition. (135)

各々寝床と寝具にわずか14インチしかあてがわれていない。日光、新鮮な空気も奪われている。逆に排泄物や病める肉体で孵った蛆が巣くう化膿した患部から発生する異臭を呼吸せざるを得ない。新兵の補充は強制徴募で造作もなく果たせるから、役立たずの傷病兵に長生きされては困るという海軍当局の悍ましい発想がそこには見られる。

こうした発想は海軍上層部により顕著である。オーカム艦長とマックシェーン軍医は瀕死の傷病兵の点呼を後甲板で実施する。軍医の診断は冷厳そのものである。肋膜炎で吐血している者に対して血痰の咳き上げ促進と称してポンプ仕事を指図する。彼は半時間もたたぬ間に肺からの多量の出血のため窒息死する。また腹水のため胸を圧迫され呼吸すらおぼつかない者に対し、怠慢と過食による肥満が原因していると弾劾する。その結果またたく間に61名の傷病兵が12名以下に激減する。これを艦長、軍医はともに国家に貢献できたとして自画自賛するわけである。

つぎは海軍の指揮系統の低さについてのエピソードである。西インド艦隊は本来ヒスパニョーラの西端でサンダー号を出迎え糧食等を補給し、敵に作戦、目的地を察知される前に直接カルタヘナへ向かうべきである。しかし艦隊はジャマイカのポートロイヤルに1ヶ月間投錨後合流する。さらに2週間前後も費やして仏艦隊の停泊するヴァーシュ島まで進む。一方仏艦隊は情報艦をカルタヘナに事前に派遣し、西インド艦隊の動向を察知して既にヨーロッパに向け出帆済みである。この海域における有史以来の大艦隊も作戦の下手際から敵の要塞の真下に陸兵を上陸させる。壊滅的打撃を蒙るのは当然すぎることである。

英艦隊とカルタヘナのスペイン軍との戦闘の火蓋がいよいよ切られる。戦いの描写が真に迫る。

We had not been many minutes engaged, when one of the sailors brought another on his back to the cockpit, where he tossed him down like a bag of oats, and pulling out his pouch, put a large chew of tobacco in his mouth, without speaking a word. Morgan immediately examined the condition of the wounded man, and cried out, "As I shall answer now, the man is tead as my great-grandfather."—"Dead," said his comrade, "he may be dead now, for aught I know, but I'll be damned if he was not alive when I took him up."
(159)

戦闘が始まっていくらもたたないうちに水夫が手術室へ仲間を背負って来て、それを燕麦の袋のように放り出す。兵士を下したあと、煙草入れを出し一言も口を利かずに一服するのである。軍医助手が傷病兵の状態を診て「くたばってるぜ」と。——「くたばってるかい、担ぎ上げた時はまだ息があったぜ」と水夫がこたえるのである。傷病兵が燕麦の袋と化す冷血な生命の浪費である。国家的見地からすればカルタヘナ戦役

も英国の海外飛躍の一コマにすぎない。強制徴募した新兵が斃れようが国家は些事には振り向きもせずに進軍するのである。

戦闘後、ロデリックは身の振り方を迫られる。出航命令が出たため帰国を期待したものの、西インド諸島における軍医不足という現状、さらに母国での苦難を思い出し残留を決断する。残留を希望したにもかかわらず乗船したりザード号が公文書を海軍省へ持ち帰る任務を負うことになり急遽りザード号とともにイギリスへ向け出帆する。しかし帆走中、艦長が掌砲長提案の水深測定を無視したため船はシリー諸島（イングランド南西部沖合の島）近くで座礁する。何とか上陸した後、今まで虐待され続けてきた艦長に復讐すべく決闘を申し込む。決闘中、勝利をほぼ手にしながら後頭部に背後から一撃を受け身包みはがされた上、サセックスの浜に取り残される。強制徴募で入隊した海軍とは置き去りという形で決別するわけである。

頭に傷を負ったまま置き去りにされたロデリックは助けを求めて浜辺をさまよう。ある婦人の看護のおかげで元気を取り戻し、婦人の推薦で近くに住むセイジリー夫人のもとで召使として働くことになる。召使になったロデリックは夫人宅で夫人の姪のナーシッサ（粗削りなロマンスのヒロインでロデリックの結婚相手）に出会う。ある日、夫人とナーシッサからタッソーの「解放されたエルサレム」の一節につき質問をされた折、教育の利点を付与されているロデリックは何のためらいもなく読み解いてしまう。またナーシッサが婚約相手のティモシー卿に乱暴されるところを運よく救ったりもする。しかしティモシー卿はロデリックの祖父同様その土地の治安判事を兼ねているため、ロデリックに対し逮捕令状を簡単に発行できると聞かされる。ロデリックは仕方なく夜陰に乗じて村から脱出せざるを得ない。このエピソードからこの時代の法制度の不備が前景化されるわけである。

帰国したロデリックは財産目当ての求婚者としてコーヒーハウスとか

劇場通い、賭け事、ロマンスと気ままな生活を送る。そんな中、ロマンスを求めてパースまで出かけた折ナーシッサに再会するが、ナーシッサとのロマンスは不調に終わる。先行きが不安になったロデリックは賭け事に走り、手許金は激減する。当座の生活費に困ったため仕立て屋に借金をしたまま上等な服を数着モンマス街の古着商に半値で売ってしまう。運の悪いことに、売却が仕立て屋に露顕しそれがもとでマーシャルシー監獄へ連行されてしまうが、ギニアから帰国したボウリングが借金を完済しマーシャルシー監獄から救出してくれる。借金を完済後ボウリングは船医の助手としてロデリックを航海に誘う。今度の航海はギニア地方で黒人奴隷を400人買い込みそれを南米のニュースペイン（現在のアルゼンチン）で売りさばくことである。ここでこの物語の冒頭から陰になり日向になりロデリックを助けてくれる叔父ボウリングに一言触れておきたい。ボウリングは死亡したロデリックの母親の兄で海軍軍人とか船乗りを生業としている。つぎの引用は臨終の床についたロデリックの祖父に向けた荒っぽいボウリング流の科白である。

“What! he’s not a-weigh? How fare ye, how fare ye, old gentleman?—Lord have mercy upon your poor sinful soul.”—Upon which, the dying man turned his languid eyes towards us, and Mr. Bowling went on—“Here’s poor Rory come to see you before you die, and receive your blessing.—What man! don’t despair—you have been a great sinner, ‘tis true,—what then? There’s a righteous judge above,—an’t there?—He minds me no more than a porpuss.—Yes, yes, he’s a going,—the land-crabs will have him, I see that; his anchor’s a-peak, i’ faith.” (26–27)

上掲引用文の科白や祖父死亡後の科白からボウリングが生粋の海の男であることが強調される。たとえば、遺産相続の目論見が破れたために

失望したロデリックの励まし方はつぎのようである。心軽やかに、薄っぺらな半ズボンで、世界を股にかけようじゃないか、勇気ある少年よ。ボウリングは海の男らしくロデリックを励ますために海へいざなうわけである。ロデリックは幾度となくボウリングの資金援助により窮境から脱することになるが、その資金がすべて海の生活から賄われていることを忘れてはならない。

(IV) 結論

黒人奴隷については、計画どおりニュースペイン到着後2、3日で全員を売りさばいてしまう。黒人奴隷の売却後ロデリックは「私たちはわれわれの言い値で5倍の数の奴隷だって処分できたであろう」と述懐する。注意したいのは、奴隷に対して憐憫の情を示す者がひとりもないことである。それどころか、船上におけるチフスに似た伝染病騒ぎの時にはつぎのような発言をする。航海中にこれとって特筆すべきことは何もなかったが、ただ突如奴隷たちに広まったチフスに似た伝染病で多くの乗組員が命を失った。その中には私の助手もひとり含まれ、かわいそうにストラップまで命を落とすところだった。さらにロデリックは奴隷売却後「われわれの船は不快な黒人たちから解放されると、私の気分は晴れ晴れとしてきて、心ゆくまでパラグアイの新鮮な空気を胸に吸い込んだ。というのはギニアの海岸を離れて以来実際には私のほうが彼らの奴隷のようなみじめな生活だったのだ。」と述懐する。

奴隷の売却後ロデリックはブエノスアイレスで父との再会を果たす。父はブエノスアイレスではロドリゲスと称し大変な資産家である。ロドリゲス氏は背が高く、極めて体格のよい男で、人に尊敬の念を抱かせる立派な風貌と物腰で、年齢は40歳を超えているようだと紹介される。

ロドリゲス氏は亡き妻、息子であるロデリックへの思いは口にするが、莫大な資産形成に触れることはない。ロドリゲス氏が身の上話のさなかに唯一触れるのはつぎの件だけである。南米に定着後、知り合いの貴族から勧められたことは、宗教上の制約のため自分には貿易、商売以外にはすすむべき道がなかったということである。ロデリックやボウリングがロドリゲス氏と再会する直前に黒人奴隷の売買などで大儲けをしたことを思い出せば、ロドリゲス氏の本意はひとまず措くとして、その資産形成に何らかの形で黒人奴隷が寄与した可能性があることは想像に難くない。ここで注意しなければならないことは、この問題に対する登場人物らの姿勢だけでなく作者スモレット自身のそれである。スモレットの姿勢を考える時に参考になるのが第3作目の作品である『サー・ランスロット・グリーンズ』(1762)の第9章に描かれている村の選挙風景である。立候補者はトーリー党のサー・ヴァレンタイン・クイックセットとホイッグ等のアイザック・ヴァンダーベルフトの二人である。前者の政治スローガンは「外国出身者お断り、古き良き英国万歳」である。その支持層は大地主(gentry)である。しかし実情はクイックセット(生垣)という名前に含意されているようにヘンリー・フィールディングの『トム・ジョウズ』(1949)に登場する地主ウェスタン同様狐狩りに明け暮れる田舎地主に過ぎない。後者の政治スローガンは「奴隷制反対、カトリック僭王反対」である。しかし彼がユダヤ系であることがアイザックという名前に明示されている。彼は既に市長も買収済みであることもほのめかされている。両候補の政治スローガンに中身がないことは彼らの名前とか彼らが立っている演説壇に象徴されている。クイックセットの演説壇はさらし台に厚板を渡したものである。ヴァンダーベルフトは演説が終了すると同時に樽の鏡が割れ一瞬にして支持者の視界から消えてしまう。つまり、この選挙風景から透けて見えることは、当時すでに奴隷制反対という言葉は田舎へも浸透していたということである。にも

かかわらずスモレットがこの問題にさほど関心をいだいていないことは、黒人奴隷の問題を政治スローガンに掲げたこの選挙風景に対し自論を展開しないまま、単に揶揄しているにすぎないことから明らかである。社会の不正への叱声のためピカレスク小説という形式を用いて英国社会の俯瞰図を描いてみたが、黒人奴隷の問題がスモレットの脳裏をかすめることは期待薄のようである。高貴な野蛮人の神話を体現するフライデーが登場する『ロビンソン・クルーソー』ほどの強烈な植民地主義言説とは一味違った言説が『ロデリック・ランダム』の中に揺曳していると言い換えてもよい。

資産家である父との再会を果たせば粗削りなロマンスの大団円は近い。ロデリックは父とともに帰国し、故郷のスコットランドへ向かう。帰郷後判明したことは祖父の遺産を相続した狐狩り好きの従兄が遺産を浪費してしまい、所有地が競売に掛けられることになっているという噂であった。それを知った父は従兄の所有地をすべて買い戻す。父の援助もあり、ロデリックとナーシッサの結婚を機に物語は終結する。

注

- (1) Tobias Smollett, *The Adventures of Roderick Random* (The University of Georgia Press, 2012), *Roderick Random* およびその他のスモレットの作品からの引用はすべて Georgia 版からであり、以下頁数は引用に続けて括弧に入れて示す。
- (2) Ian Watt, *The Rise of the Novel* (University of California Press, 1957) 参照。
- (3) ピカレスク小説については拙論『英国製ピカロの世界』（広島修大論集第18巻第2号、1978年）等を参照した。
- (4) ダニエル・デフォアの『ロビンソン・クルーソー』については拙論『『ロビンソン・クルーソーの生涯と数奇な冒険』の世界』（語研紀要第28巻第1号、2003年）等を参照した。
- (5) 富山太佳夫、『文化と精読：新しい文学入門』（名古屋大学出版会、2003

年) および『英文学への挑戦』(岩波書店、2008年) から有益な示唆を受けた。

- (6) Charles Dickens, *Sketches by Boz* (Oxford University Press, 1973), Scenes VI 参照。

